

ああシベリア

長野県 杉田正成

死の行軍

— 拉古收容所からシベリア・アルチョム炭
鉱—

拉古收容所は、食料の積み込み作業でてんてこまいであった。馬はチャン馬と言って日本の馬より体が小さく、可愛いが足が短く太いのが特長で、力の強い馬であった。

馬車に荷を積んで、予備の馬を連れて一団体千人とか二千人がまとまって出発となった。肩の荷が重く、とても日本まで持つて行けそうもない。一つ捨て二つ捨て、だんだん軽くして歩く。

九月の空はもう満州は寒く氷がはる。特に夜になると更に寒さが増す。夜の食事の準備も、歩いている間に薪の心配をして枯れ枝を拾いながら歩く。道はずれるとソ連兵はダワイ、ダワイと言

って銃を撃ってくる。あのマンドリンと言って肩から腰に構えて撃つ、引き金を引くと三十発が連続で出る機関銃を持っている。

一日歩いただけで肩の荷物はほとんどなく、雑袋一つ、毛布一枚、これだけは放せないを持って行く。なんとか飯になり寝ることになった。山の斜面のちょうど沢になった所で毛布にくるまり寝た。

あまりの寒さに目が覚めた。ううー、寒い震えがきた。降った雨が山から流れて来て体の下を流れている。体の下は川のようにだ。そんな所に寝ていたのだ。毛布は水を含み重く、動きがとれない。丸まって寝ていたので体が抜け出ないうえにぐっしりぬれている。寒い。雨は物凄いだしやぶりである。皆は目が覚めているらしいが声がない。重い毛布を頭からかぶって雨をよけるが、満州の雨はものすごい。乾いているところがない。夜明けを待つよりしょうがないので足踏みをして体を動かし寒さをこらえた。

一晩中震えながら夜明けを待つ。空が明るくなって来たが飯を炊く薪がない。みんなぬれている。燃えない。雨の中での飯作りは大変だ。半煮えの米を噛み噛み又歩け歩けの行軍になる。

何日歩いたらソ満国境に着くのだろう。国境まで行けば汽車が待っているのだ。皆が声を掛け合つて歩く。元気はあまりなし。

衛生兵として最後尾の食糧車の後について歩く。空は晴れてきた。よかった、よかった。だがだいぶ疲れて来た。前の方を歩いていた兵隊がだんだん遅れて食糧車の所まで来た。見ると昨夜の雨に叩かれたためか熱もある。これはだめだ。置いていくわけにはいかない。食糧車に乗せる。

しかしだんだん落伍者は増えてくるばかり。車に乗せてはだめだ、皆降ろせの命令だ。仕方なく車につかまって歩くようにとすすめる。長い道のりに馬もまいってきた。

馬の足から血が出ている。見ると、蹄鉄が減り爪が減り肉が出ている。予備の馬にかえてやる。

落伍者は後を絶たない。落伍者は皆下痢をしていて、見ると血便である。もうこれ以上皆と一緒には歩けない。少し行つては尻まくり。付いていてやりたいが、なすすべもなし。どうしようもない。遠くに馬車が行つてしまふ。

「次の休息所が近いから後からゆつくりきたまえ」と言つて何人かを残し先を急ぐ。置いてきた兵隊は二度と隊列について来なかつた。

満州にはオオカミがいる。その数は多い。戦争になる前のことだが、部隊の歩哨がオオカミに襲われ、食べられてしまったことがある。

虎林陸軍病院でも夜は看護婦は官舎に帰らず病院で泊まることになる。病院では豚を沢山飼っていた。夜になるとその豚を何十頭ものオオカミが襲つてくる。何頭かの豚がさらわれる。しかたなく日暮れになると豚の頭だけ遠くにばら撒いておく。その頭を取り合つて山へ帰る姿は凄まじい光景である。ぎらぎらと光る目、うおー、うおーという鳴き声は、銃を持っていてもあの数で襲われ

たら生きられないだろうと思わせる。

今に追いついてくるか、後を見ながら馬車に近づく。皆だんだん声が出なくなってきた。疲れているのだ。馬車につかまって歩いている者も、歩く姿はもうふらふらだ。

馬車に乗せてやりたいが、馬もかわいそうだ。食糧も千人からの物になると重い。車も「ぎし、ぎし」と音が悪く今にも壊れそうだ。油もくれずによく動くものだ。山を登り川を渡り、道なき道を四頭だての車三台、目的地まで壊れずに行くことが出来るか心配であった。

ついに後からついてくる者の姿はなかった。食糧もなし、おいてきぼりになった兵隊は満州の原野の土となったか、オオカミの餌になったか、遠くの空を眺め、無事を祈るのみであった。

もう歩けない。足にまめができた兵隊が来た。靴がはけないほど足全部がまめである。どこで拾ったのか手榴弾を持っている。兵隊の言うのに、これ以上皆と一緒に歩けない、どうせ死ぬなら皆

の見ている前で死んでいくと言う。

そんな事させていいのか、衛生兵として思いは複雑である。さりとて薬はなし。どうにも手当ての方法がない。

山陰に行き皆の見守る中、胸に抱えた手榴弾を爆破させた。この兵隊の家族にこんな話ができようか。

昼は歩き、暗くなったら野宿。重い毛布は持つて行けない。捨ててきた。何も体に掛けて寝るものがない。服は夏服で薄い。死んでいる兵隊の服を脱がせ、弱っている者に着せて歩く。

寒い夜がきた。体を寄せ合って、お互いの温もりで寝る。朝少し明るくなってきた目覚めて見ると、原野は一面真っ白く霜がおりている。頭から足の先まで霜柱が立っている。なんと寒いだろう、早く火に当たりたい。集められた焚き物に火をつけた。よくマッチをぬらさずに持っている者がいたと感心する。早速火に当たり飯の用意を始める。

「すぎたー、すぎたー」

飯盒をさげて跳んで来た、同年兵の宮崎君だ。

「俺、半分食べたから、あと杉田食べろ」

「いやーありがとう、ーありがとうー」

おかずはなかったがおいしかった。生きた気がした。ろくな物を食べていない腹はすききつていた。そこへ白米だ。こんな物をどこで手に入れたのか。この時ほど米のおいしさを知ったことはなかった。

この宮崎君もシベリア、アルチョム炭鉱で亡くなっている。忘れられない戦友である。

もう十日近く歩いたのではないかと思うころ、

「おーい海が見えるぞー」

小高い山の上に出た時に海が見えた。ゆっくり見ている暇がない。山を降りるともう海のようなものはまったく見えない。日本へ帰れる思いが募るばかり。その後行けども行けども海らしいものは見えなかった。

後で分かった事だが湖であった。(興凱湖であ

る)

どこをどう歩いてきたのか、確かに十日ぐらいは歩いて、国境はすでに通過しているはずだ。汽車の煙のような煙が見えた。

「汽車だー、汽車だー」

線路のある所へ出た。汽車が待っている、ありがたい、日本へ帰れる、足の痛みは安堵のせいでは和らぐ。

見渡すところ、満州全土から集まって来た兵隊がああ広い原野にいっぱいだ。日本へ帰るのだから、客車ではない、この際どんな汽車でもいい、なんでもいい、早く乗って帰りたい、そんな思いだけであった。

先頭の兵隊達を乗せて汽車は発車していった。集まっている兵隊のほんの一部である、まだまだ大多数の兵隊がいるのに。

「どうしたんだ」怒りを含んだ口調で怒鳴っている。ソ連兵の説明では、一つ先の駅まで行くと汽車があると言う。腰が抜けたようだった。

続死の行軍

—ソ満国境からアルチョム炭鉱へ—

もう一つ先の駅まで、もう一つ先の駅までと、だまされどおしで、約十七日ぐらい歩かされ、着いた所がナホトカより六十キロぐらい離れている「アルチョム」と言う炭鉱であった。

街らしい所に出た。ロシアの住民は日本兵が珍しいのと「戦勝国なんだぞ」そんな顔と見下した目でジロジロ見ている。子供までなにか大声を上げてののしっているようだ。ロシア語が分からなくて幸せだ、何を言っているのか、ちんぷん、かちんぷんであった。

町の真ん中で行軍が止まった。「皆腰を下ろせ」、道の真ん中に疲れた足を投げ出し休んでいると、住民が一斉に我々の持ち物を略奪し始めた。我々の持っている時計が一番欲しいようだ。ソ連の警戒兵が空に向かって銃を発砲したので住民は慌て逃げ去った。時計は日本兵で持っていない者はなかったが、ロシア人は部落に一つぐらいしかな

いらしい。兵隊でも時計を持っているのは上官で階級の高い人だけという、貧しい国なのだ。しかし兵器だけは日本より勝っていた。戦車にいたっては、その大きさ、性能は素晴らしい。日本の戦車は腹の下に入ってしまったつぶされてしまう。

この戦車は、ノモンハン事件で日本軍に完全に叩かれ全滅の戦いであったと聞く。それ以後改良を進め、高性能で強力な戦車を造り出したのだ。

足の痛みが治らない内に出発の合図。その時、一人の男の子が私の顔をじつと見ているのに気がついた。何か欲しそうだ、可愛い子であった。何かやろうと思って見たがやる物がない。ポケットを探して見ると日本円の五十銭銀貨があった。持っているにも何にもならないだろう、この砂の中に入れておくよと目で合図して出発した。腰を上げる時「ここだ、ここだよ」と指をさして知らず。コックリと頭を下げ、にっこり笑顔を見せた、手を少し振ってやり、又だんまりの行軍が続くのだ。

今日もこの草原で寝ることになるのか。食糧も

少なくなってきたが日もすっかり落ち、ぼちぼち夕食を考える。米は少なく、大豆がおもな飯になるが、とても足りない。

足しにするものを探す。いた、いた、カエルで

カエルの思い出

カエルは小学校のころ、解剖に使ったのを覚えていた。両手両足を板の上に針で止め、腹を切り開き、これが胃でこれが腸でと色々とお教わったが、食べることは知らなかった。最近聞くところによると、食用カエルとして食べられるカエルがいるそうだが、この時はそんな話のない時である。雨がエルであるのか青ガエルと言うのか、手当たり次第取っていた。

ロシア人は何にするのだと聞く。食べるのだと言ったら顔をしかめて「ニハラショ（だめだと言うことらしい）」と言って唾を吐いて行ってしまった。

皮をむくがうまくいかない。小さいのは特によ

くむけない。大きな鍋に塩汁ができた。カエルが両手両足を広げて泳いでいるように見える。しかし味はよい。カエルのおいしさはここで知った。

今では気の利いた飲み屋ではつまみとして出る店もあって懐かしい。聞くと、これは赤ガエルとかで食用であると説明していたが、今はあまり食べたくない。

夜は冷えてきた。丸くなり体を付け合って寝たが、行軍の疲れで、わけも分からず寝入ったようだ。朝にならないのに目が覚めた。とにかく寒い、寒いのだ。いくらか明るくなってきた。見渡す限り霜で真っ白だ。我々の体も頭の先から足の先まで真っ白だ。自分の吐く息が風に吹かれて冷え、顔に当たり冷たい。体を動かして足をさすってみる。よくぞここまで歩いて来たもんだ。しかし文句など言っている者は誰一人いない。それどころか疲れて声にならないのだ。朝飯も何とかしなければと思うが、大豆があるだけで。鉄帽を火にかけて炒り豆を作る。雑糞ざつづにありったけの炒り豆を入

れて夜明けの空を見上げれば晴れている。なんと有り難いことか。これで雨でも降ったら終わりだ。雨具もなし、ぬれて乾かぬ間に霜が降る夜にでもなったら、それこそ寝たまま死となる。

すっかり明るくなってきた。又行軍の準備だ。

馬は大丈夫だろうか、心配だ。だんだん減ってくる食糧ではあるが、まだまだ沢山ある。千人からの食べ物重いだろう。もう何頭かの馬は歩けないので殺され、鍋に入って我々の食糧の足しになっていった。

アルチョム炭鉱の死

—舌切り雀のオートミールに耐えて—

歩け歩けの行軍に、さすがの馬も最後は一頭だけとなる。十七日間ぐらいの道のりを、ろくな物も食わずに歩き続けて来たのだ。兵隊も数十人が行軍の道端で、どこかわからずに死んでいった。

今になってその顔だけが浮かんでくる。

「おい、着いたようだぞ」

誰かの声でしたが「そうか」と声が出ない。重い足を引きずりソ連兵舎に入った。早く掃除をしてねぐらを作らねばと思っていると、何人かずつに分かれて班が作られた。

「班長集合」の声がかかる。

長い行軍で疲れ果て二、三日は休みにしてくと願ったがそうはいかなかった。明日からの作業の割当が決められ、石炭掘り、坑木運びが各班に割り振られた。

あのアルチョム炭鉱は斜め坑道で、八百メートルほど地下へもぐって掘る作業であった。

坑木運びは、直径二十センチから三十センチの丸太で長さ二、三メートルぐらいを外から二人で担いで坑道口まで運ぶが、血気盛んな二十歳代の男であるはずなのにふらふらした足取りで、なんとも情けない姿であった。

その作業の警戒兵はやはり捕虜になっていたドイツ兵だったのでだいぶ理解があり、まだ若く体格も良くて一人でその一本を担いで行く。日本人

には優しく、作業も「休め、休め」と手つき手真似で休ませてくれ、ソ連兵が来ると「来たぞ、来たぞ」「働け、働け」と言つて助けて笑つてくれた。しかし、どうにも腹に力が入らない。運ぶ姿を見て笑っているが、笑われてもどうにもならないのだ。毎日が地獄の作業であった。食べる物といつたら、日本へ帰つてから分かつたが、オートミールと言ふものだった。

「何だこれ、舌切り雀じゃねえぞ、のりじゃねえか」笑うに笑えず、すすつて終わりだ。パンといつたら黒く、水を含んだ物で三キロと重いが、それを二十二人で分ける。寒さでかちかちに凍っているパンをどうやって分けるのか。石で叩くと粉になってしまった。その粉をテントの敷物の上で目の色を光らせて、一山、一山平等に、高さを見て「あの山は高いぞ」「この山低いぞ」と、当番は大変な苦勞だった。オートミールの量も缶詰(三センチぐらいの厚み)の器に一杯、他に汁も同じ量。汁には豆が一粒入つていればいい方で、冷た

い塩汁であった。

凍つて粉になつたパン屑を舌の上に乗せたがおいしいものではなかつた。だが今はそれしか食べる物が無い、我慢するより仕方なかつた。毎日体力が落ちていくのが目に見えてきた。二十歳の若さでも情けない姿であつた。

作業が終わり真つ黒になつた手足を洗う元氣もなく、着たままで寝る日が毎日であつた。

「おい、帰りにえな」誰かぼつんと一言言つた。それにつれ、あちこちから声が出てきた。「おれ、帰つたら寿司が食いたいな」「おれだつて、寿司でも何でも食いたいよ」贅沢は言わない、米の飯が腹いっぱい食べたいという思いで、寢床では毎日食べる話の花が咲いていた。大福だ、安部川だ、何といつても味噌汁だ、日本人は味噌が欲しい。あれやこれやの話も結局食べる話しか出なかつた。そんな話をしながら眠つた朝のことだつた。

「おい朝飯だぞ」と隣の兵隊を揺り起こす。なんともう息がない。右隣の兵隊を「おい朝飯だぞ」

と起こしたがこれも又死んでいる。寝るときにあらんなに日本へ帰ったらあれを食べるこれを食べると言っていたのに、両側で死んでいった戦友がいた。

しかし、俺は生きている。毎朝目が覚めると「おう」俺は生きていた、と思う毎日であった。毎日死んでいく戦友はほとんど栄養失調と発疹チフスだった。

栄養失調で死ぬ兵隊の皮膚はもう色も肌色でなく白く灰色になり、皮膚を摘んでみると、摘んだままに富士の山のようになっている。頭髮や鬚は指で摘んで引くと簡単に抜ける。毛の色も灰色になり、人間の顔つきでなく異様な姿になり、すべての骨は全部外から見分かるようになって、骸骨が歩いているようになって死んでいった。

七十三人の死を悼む

—アルチョム炭鉱から 零下四〇度の貨車の中—

十二月のある日、「今日は全員、健康診断をす

る」との知らせがあった。健康状態によって区分されるといふ。このアルチョム炭鉱に一千人近くの日本兵が收容されて、既に三分の一近い三百人もの戦友が栄養失調等で死んでいった。その中には同年兵で人一倍汗かきの滝沢千秋君もいた。彼は下士官候補として優秀な青年であつて、初年兵の教育に力を入れていたが一晚の熱で逝ってしまった。

零下四〇度の寒さで死体はもうすっかり凍りつき、かちかちになっている。肌着一枚の体を見ると灰色になっていて、目だけぱっちり開けてにらんでいるようだ。頭と足を持って、一、二の三でトラックに投げ込む。その時の死体のぶつかる音が今でも耳に残っている。

トラックは三百人もの死体をどこへ運んだのであろう。不思議でならなかった。ずっと後になつて、死体を処理させられた兵から聞いたことだが、トラックで運ばれた死体は吹雪の海に投げ出されたそうだ。腕や又足が折れる不気味な音に、「おい、

静かに下ろせよ」と言われ、真っ白に凍った死体は、市場で見るマグロの瘦せた干物のようだったと言う。

死体処理の兵隊は、一面、氷に閉ざされている海に人間一人が入るくらいの穴をあけて待っていて、一体ずつその穴に落として流す。まごまごしてはいられない。寒さで穴が塞がってしまうのだ。ソ連兵は「ダワイ、ダワイ」（早くやれ、早くやれ）とせかせる。分かっているが一人一人の戦友との別れである。そんなに簡単にゴミのように扱えない。言葉では言い尽くせない悲しい別れなのだ。今になって思えば、あの時の戦友は祖国日本へ流れ着いているのだ、日本へ帰ったと信じたい。いや、御霊だけは帰ったのだと思う。話を聞いて、俺も後から行く事になるといつも思っていた。今日か明日か、早いか遅いかの違いである。泣くに泣けない涙がまつ毛に凍り付いて目が開かない。一級から三級までの区分で、一級は一番健康状態が良いとされ居残りになる。二級と三級と入院患

者は日本へ帰るのだと言う。又「本当かな？」思いは皆同じであった。（嘘なのだ）

七百人ほどはほとんど半病人であったと記憶する。菊地衛生軍医以下、各車両に分け乗り込む、一つの貨車に四十人ほどの数であった。どこの所属の兵隊か名前も分からない。それに病人ばかりで力なく、声も出ない。

前後二段になっている貨車はゴザ一枚敷いてない。十二月のことだから貨車の真ん中には薪ストーブがある。しかし薪もマッチもない。何時間も過ぎたころ、各貨車に石炭をスコップで三杯ほど投げ込んでくれた。だがマッチもない、どうやって燃やすか、途方に暮れるばかりであった。

零下四〇度の寒さで火の気のない貨車の中、早く暖めてやりたいがどうにもならない。

こんな仕打ちを許せるか。彼らの行為は人の常識では考えられない。お前らは日本へ帰るのだから外套なんかいらないうって取り上げられた者もいた。泣くに泣けない。「病人だぞ」と怒ったが

どうにもならない。回りを見渡してもワラ屑一つ無い。しばらくして種火が来た。

「よかった、よかった」少し笑顔が出た。それにしてもこんな種火で、ソ連の質の悪い石炭の固まりにどうやって火を付けるのか。だが、なんとかして付けなければ。皆に頼んで貨車の板壁のささくれている所をはぎ取る。楊枝のような細い木屑が集められた。「よし、これで付くかも」と腹這いになり慎重に口をとがらせ「ふー、ふー、ふー、ふー」と軽く強く吹く内に「付いた、付いた」皆がストーブの周りに集まった。

どこの収容所へ行っても班長をやらされていたので顔と名前が知られていた。(衛生兵であったことも)

周りの誰かが「杉田、お前が一番苦労したのだから一番前であたつていいぞ」と言ってくれた。

そんな事を言われても皆病人であり、今にも倒れそうな三級品ばかりである、これぐらいの事でも精いっぱいだった。

日本へ帰れるという思いがかえっていけなかったのか、気持ちの上で安心したのか、一人の兵隊が目をつむったまま声が出ない。「おい、どうした、しつかりしろ」と声を掛けたが返事が無い。そーっと真っ直ぐに寝かしてやる。息がしない。胸に耳を当ててみるが心臓の音がよく聞き取れない。だめだ、「おい、誰かこの者を知っている者はいないか」と尋ねたが誰も知らない。名前もどこの部隊の者かも分からず死んでいった。

日本へ帰る夢でも見ているのか、顔は穏やかであつた。「おい、発車するぞ」の声と一緒に汽笛が鳴った。

気持ちばかりの暖がとれて、いくらか体も楽になった。

だが、走り出したおかげで却って風が吹き込んで来て更に寒さが増してきた。

一日焚いて石炭は終わってしまった、それっきり追加の石炭は来なかった。お互いの体の温もりで暖を取ろうと体を寄せ合い、弱っている者を真ん

中に囲うようにしたのだが、それでも二日目には又二人死んでいった。三人の遺体を並べ、皆で黙禱し冥福を祈る。

そのころに分かったのだが、各人の体にたかっている虱が動きだした。死人から全部出てほかの人間に引越すのだ。虱も死んだ人間の血はうまくないらしい。俺たちは虱の餌になっているようだ。この寒さの中では病人は体がもたない。死んでいった戦友の服を脱がせ、一番弱っている者に着せてやる。

それにしても何も食べる物が来ない。一日たつて小さな駅に着いた時、貨車の窓から凍った黒パンが二、三個投げ込まれた。四十人もいるのにこれだけで、(一個三キロ)この黒パンは水を含んでいて目方はあるが水分は全部凍っている。これ又大変、切る物がない。貨車の厚い板張りの割れ口からはいだ木片でこの黒パンを削った。もちろん、粉になってしまう。手のひらに乗せてもらったが、なめる程度の量であった。「水をくれ」と誰かが言

っているが俺も欲しい。水筒はあつても皆凍つてダルマさんのようにふくれていて、振つてみたが水は出ない。死にそうな者が出た。「水、水を」と言つて上がらない手を伸ばしている。とつさに考えた。水筒の口から小便を入れた。これも技術が要る。うっかり金の所にさわつたら大事な物の皮がむけてしまうのだ。小便もまともに出ない。黄色くなつた小便が少し出た、そのわずかな温かさで溶かしたのだ。

「おい、小便で溶かした水だぞ、これでもいいか」と耳もとで声をかけた。絞り出すような声で「それでいい」と首を振り、にっこり笑つてその水を飲んで死んだ。

死に水がこれでいいのか、しかし、これしかどうにもならなかつた。

五人六人と死んでいく。貨車の一角は便所にしてあり、もう並べておく場所が狭くなつてきた。窓を開けると逃げると思われ銃を撃つてくるので、窓は開けられない。死体は下着一枚にして重ねて

置くことにした。「重いけど我慢してくれよな」と、心で詫びながらの貨車の中であった。

もう三日も走っているが、どこへ連れて行かれるのか見当もつかない。一日中引き込み線の中で止まっている時もある。そーと貨車の戸を少し開けて見た。日がさしている。外は寒く真つ白の雪景色。久し振りの太陽で目がまぶしい。

誰か貨車から降りたようだ。ソ連兵の持っている銃（マンドリン）の音がした。逃げると思ったのであるが、とんでもない。十二月のこの寒さの原野を逃げられるものではない。だが水が欲しい、早く皆に飲ませたい。私も貨車から跳び降りたが、何日も貨車の中にいて体を動かしていないせいか、関節が弱つていたらしく、膝が「がくん」ときて立つことが出来ない。それでも自分の周りの雪を飯盒に詰めて貨車の下まで這つてきたが貨車に登ることができない。綱を下ろしてもらい引き上げてもらった。

これで少し水の足しになる物が手に入った。四

日、五日とどこをどう走ってきたのか。一日一回、あの貨車の高窓から投げ込まれた凍った黒パンと、雪をなめて飢えをしのぐ毎日だった。

ついに死者は九人になっていた。五百人からの兵隊を乗せてアルチョム炭鉱を発つてからもう七日もたっていた。

貨車は止まったままで動かない。どうしたのかなあーと思っていると、少し暗くなりはじめたころに下車の命令が伝えられた。菊地軍医が前の貨車より沈痛な顔で来た。「杉田、ここは何人か」

「はい、九人です」「そうか、これで七十三人だ」。死んだ兵隊の部隊名も氏名もまったく分からないまま貨車の中に置き去りにして暗い夜道を次の收容所へ、重い足を引きずり、前の兵隊の足元を見てついで行く。まったく明かりのない道。白く凍った雪明かりをたよりに歩いた。滑って転ぶ者、肩を借りてやっと歩いている者。何時間も歩いたようだが、弱っているからか、そう感じた。

收容所は旧日本軍の兵舎跡であった。部屋は暖

かくなつていてベッドは藁が敷いてある。早速その藁の中へもぐり込む。なんとありがたいことか、この時の体の楽になつたことは忘れられない。

「おい、水があるぞー」の声に我先にと兵舎の真ん中へ飛んでいくと、ドラム缶に水がいっぱいある。もう顔を突っ込んで飲んだ、飲んだ。生き返つたうまい水であつた。

朝になりそのドラム缶をのぞいて見てびっくり。半分近く減つていて、中にはぼうぶらがいっぱいいるではないか。

ドラム缶の淵を叩くとぼうぶらが下へ沈む、そのすきに飯盒ですくつて飲んだ。ぼうぶらぐらい飲んでどうつてことはない。

それより虱が暴れ出した。暖かな部屋に入ったせい、家族を増やし我々の貴重な血液を吸い取る。死ぬば生きてゐる者に引越すのだ。これからこの虱との戦いに悩まされ生きていく日が続くのだつた。

虱と遊んだ日溜まり

――発疹チフス虱の媒介により死者の山――

牡丹江ではシベリアの食事よりは少し食べ物らしき物が食べられるようになってきて、体も少しは元氣を取り戻してきた。もうすぐ日本に帰ることができると毎日夢を見ていた。

満州も三月ともなれば少しは暖かい日もあつて、風をよけて日当たりに皆集まる。太陽の光は有り難い。

腰の回りに集まつている虱が元氣に動きだす。ズボンを少し下げ上着を広げると虱は慌てて縫い目の中へ逃げる。

太っているのは虱だけで、人間の血を吸つてお尻を真っ赤にしてころころしている。

幾ら捕つても次から次とどんどん子供を殖やし、我々の貴重な血を吸い取っていく。皆の指先が真っ赤になり、板の上で潰すから板も真っ赤だ。

虱共に相撲をやらせてゐる者、走る競争をさせてゐる者、にぎやかな日溜まりであつた。

もう半年も風呂に入らず、顔も洗つてない。ど

んな顔になっているのか考えた事もなかった。顔だけは虱に食われないうでいるが、体全体はどこもかしこもぶつぶつ食われ赤くなっている。その上痒くてたまらない。その虱が人間を選び移動する。死んだ者から生きている者へと虱は増え、その虱の媒介で病人の上に病人が増えるばかり。もうどうにもならない。虱退治は、木のへらを作りシャツの縫い目に隠れている虱を上から「ブツブツ」と潰していくのでシャツが真っ赤になる。「こんなくしょう、こんなに大事な血を吸いやがって」とぶつぶつ言いながら虱退治をしていた。

食糧事情も悪く、主食は「コウリヤン」である。

「コウリヤン」とは中国のモロコシで、この赤色のぼろぼろした穀物は長い間煮詰めないと柔らかにならない。日本の米のようにはいかない。それにはまずい。噛まずに飲み込んでしまうので皆、下痢をしていて、トイレが常に満員だった。虱にやられて下痢に悩まされ栄養失調になっていき、目だけぎよろぎよろして骨と皮だけである。気持ち

だけはすっかりしているが皮膚は灰色になり、皮膚をつまんでみると、つまんだところが富士山のようになつたままで、撫でるともとに戻る。髪の毛は指でつまんで引くと抜ける。こうなつては生きられない。

寝床に入ってからこんな話になる。

「おうい、うんめえ物食いてーなー」

「そうさなー、俺は日本へ帰つたら、まず寿司だな」

「そうか、俺なんか、甘いものが好きだから大福餅か、おはぎもいいなー」

向こう隣の者が聞きつけて。

「そうか、寿司か、寿司はうめえからなー」

手つき手真似で握る真似をしてみせる。

「へーい、とろいっちゃうー」

たまらない話になってきた。

又他の者は、「俺なんか真っ白な飯とみそ汁が
ありや満足だぞ」「えーい早くけえりてえなー」

「あーあーかえりてー」毎晩のように食い物の話

が出てにぎやかであるが、よけいに帰りたい思いが募るばかり。

「おい、もうやめて寝ようや、明日も作業が待っているから……」

「起床」の声にぼそぼそと起き出すと当番が飯を運んでくる。「おうーい起きろよ、飯がきたぞー」

隣の人を起こすが、起きない。

「どうした」揺すつても起きない。脈をみたがない。死んだのである。昨日あんなに「寿司が食いてえなー」と言つて寝たのに。左隣の人も起きない。

「おい起きろ」この人もまた死んでいる。私を起こしてくれる元気もなかったのか。そうではない。栄養失調で死んでいく者は皆このように死んでいった。

夕べ、あれ食べたい、これ食べたいと言つて元気な声で話していたのに、寝ている間に、手を出せば届く所に寄り添っていたのに、苦しさも言え

ずすやすやと、しかも両側で逝つてしまった。衛生兵の務めなのに、心に何もしてやれなかった悔いが残る。飯どころではない。二人の兵隊を「屍室」に運ぶ。外は真つ白な雪と氷に埋めつくされ一段と寒い朝であつた。

もう先着がいてテントの中はいっぱいの死人で、全部肌着一枚にされ寝かされている。

虱を両側から全部引き受けてしまったのだろうが、気のせいか益々痒みが増したきたようだ。来る日も来る日も死んでゆく戦友を運ぶ仕事であつた。

一日に四十人から五十人の死人が出る。凍つてかちかちになつている。

シベリア全土から送られてきた二級、三級の病人が集められている牡丹江のこの病院である。

私もついに発疹チフスにかかつてしまった。無理もない、病人と一緒に寝起きしているのだ。その病人を昼夜寝ずの看病に疲れきつていて、熱も出てきた。あの虱にうつされたのだ。「ちくしょう、

ちくしよう」と叫んでみてもどうにもならない。熱は高くなるばかりで、もう四〇度近くになっている。「絶対死なないぞ、死んでなるものか、生きて日本へ帰るのだ」朦朧^{もろう}としてきた頭の中で叫んでいる。死んで逝く者は氣力がなくなって食べる物が咽を通らなくなるのである。

これではだめだ、何としても食べなくてははいけない。とは言うものの四〇度近くもある熱、とても咽には通らない。食物は米の飯ではなく（コウリヤン）で、とても食べられた物ではなかったが水で流し込んだ。

私もついにダウンし入院となる。朦朧とした頭の中で素っ裸にされ、この熱のあるのにシャワーを浴びせられ、大事な所の毛を剃られ寝かされた。どのくらい寝たのか分からなかったが、気がついてみると私自身生きていてはないか。夢も見ないでこの時ばかりはよく寝た。

特別に葉もなく、注射もしてくれず、何で目が覚めたのか分からない。この寝床だけは虱がいな

いのか、いつものむずむずがない。それでよく寝られたのだった。

満州もやつと氷が溶けてきた。ある晩のこと、歩ける者や比較的元気な者に演芸場に行ってもよいと言ってきた。誰が何をやってくれるのか分からないか、筵のどんちようではあるが、なかなかのものである。日本にいたところ何かやっていた人達に相違ない。なかなか上手い。何回かの拍手喝采の中、まだ演芸が終わらないのに「全員外に出ろ」の声がかかった。

「何でだ、まだあるんだぞ」
その時であった

「日本へ帰るのだ、早く戻って荷物をまとめるように」と言う。「いやー」待ちに待った帰郷に皆の歓声がわいて一目散に兵舎に戻り荷物をまとめる。その夜はなかなか寝つかれず、思いは日本にいる母や親父のこと。弟、妹は元気か、走馬灯のように次から次へ浮かんできて、朝方近くになり

わずかにとろっと寝たようだった。

皆晴れやかな顔で整列して、見合わず顔は皆笑っている。故郷日本へ帰れるのだ。駅まで歩く足がとても軽い。しかし、あのたくさんの戦友の屍をそのままにして帰っていいのか、後ろめたさに心は重い。きつと寿司を上げてやろう、大福餅も、白い米の飯もと、手を合わせて一人一人の顔を思い出しながら汽車に乗り込んだ。

寒い、それも感じないほど気持ち浮き浮きしている。汽車の窓から眺める景色も少し緑が見える所もあり「春も近いな」もう日本の空を重ねて見ていた。

汽車といつても貨車で、戸を開けると風が入り過ぎて寒い。ストーブもなく、「閉めてくれ」と誰かが言った。

そのうちに一人が「おい、この汽車、方向が違うぞ、日本へ向かっていない」と言い出した。「なに、そんな」と言ったきり声が途絶えた。

幾日乗ったのか分からない。見渡す限りの草原

をどこへ連れて行くのか、どうなっているのか全く分からず、皆の顔もすっかりしよげていた。

「おい、いったい俺たちをどこまで騙すんだ、許さんぞ」と怒り出したがどうすることもできず、汽車の向くまま走るままであった。泣きたい思いであった。子供なら泣いていただろう。皆も心では泣いていたと思う。

「元気を出せ、シベリア鉄道に入ってナホトカに行くのかもしれない」「そうだ、そうだ」と気を取り戻し、皆の顔に又笑みが出た。しかし、何となく不安な気がして外の景色を見ていた。汽車が動いているので前後の貨車の様子も全く分からず、揺れる汽車に身を任せ、果てしなき草原を走っていく。低い山が見える所で汽車は止まった。

どうしたのかと少し戸を開けて見ると、天気は良かった。

「全員降りろ」の声がかかる。こんな所に降りしてどうするのか、皆不安な気持ちで降り整列した。

着いたのはナホトカなんかではない。とんでもないシベリア奥地で、まだこれから山奥へ歩くのだった。

どのくらい歩いたのか分からないが、一日中歩いて着いた所が山奥で、建物も無い森の中である。

これから自分たちの寝起きする建物を作るのだと言う。ところが道具がないので土で家を作る。穴を掘り、木の枝でドームのように屋根の部分を高くして、掘った土を水で練らせ、屋根全体に草を乗せた上に厚く塗って出来上がり。入り口は草を編んで作ったのれんであった。

場所は後で分かったが、スイソエフカという引込み線駅から一日中歩く距離で、とても逃げて日本へ帰れる所ではない。それでも逃げ出して蜂の巣のように撃たれ死んでいった兵隊もいた。昭和二十一年春五月の事である。

モグラ生活

—南京虫とマリアのおまけ付きと戦う—
スイソエフカの引き込み線終点駅で貨車から降

ろされ、一日中歩いて着いた森の中には建物などなかった。五、六人が寝られるよう地面に直径三メートルぐらいの堅穴を掘り、木の枝などで屋根とした原始人のような仮住まいでの「モグラ」生活が続いた。

千人もの捕虜を収容する大きな建物をすべて人力だけで作るのは容易なことではない。川を挟んで五百人ぐらいが住める二棟の宿舍作りに、穴ぐらの仮住まいから毎日かり出される。一抱え(約六十センチ)もある大木を四本立て建物の骨格とし、四本の柱の間に一間(約一、八メートル)間隔ぐらいに間中を立て、この間中の間に横にした丸太を積み重ね壁にする。更に丸太と丸太の間を埋め、暖かくするために建物の周りの排水溝を掘った土を練って壁に付ける。

しかし、この練った土はそのまま丸太に叩き付けても落ちてしまうので、柳のような細い枝を太い針金を切って作った釘で×字に打ちつけ、その上にソフトボールぐらいに練った土を叩き付けて

壁にする。外と中から土を付けた壁の厚さは五十センチ近くにもなる。天井裏も丸太を並べ、その上に同じように土を乗せて頑丈な捕虜収容所が出来た。

数カ月もかかった収容所を作る作業の間の生活は、最初に地面を掘って作った竅穴で過ごした。

誰かの歌の文句じゃないけれど、電気もなし、ランプもなしの穴の中、真つ暗では人間は住めない。明かりが欲しい。山から脂やに(樹脂)を含んだ松の木の根っこを掘ってきて、割り箸のように細く割り、燃やして明かりにした。

朝起きてびっくり、皆の顔が真つ黒で、煤を吸った鼻からは口や眼の周りがパンダのようになり、見られたものではない。松の木の脂が取れない時は自動車の古タイヤを同じように細く切つて代用したが、これも黒い煙がもくもくと立って黒くなるのは同じであった。

出来上がった収容所は広く、二段ベッド式で丸太を並べたままなので寝ても背中が痛い。枯れ草

を沢山敷いて寝たが毛布はなく、外套を掛けただけの寝床で、足が冷たく膝を抱え、しつかり身を寄せてお互いの体温で温めながら眠る。

収容所の中は薪ストーブで暖房しているが、この寒さと広さではとても暖まらない。帽子までかぶったまま寒さをしのげるものは何でも身に付けて寝る。朝になると土間は真つ白に霜柱が立っている。早く暖かくなって欲しい、早く来い春、とただひたすら待ち望むばかりであった。

春とはいっても五月でもまだマイナス一〇度ぐらいだが、五月末からずいぶん楽になった。福寿草が黄色く辺り一面に咲き、やっとこの冬もなんとか生き長らえたか、との思いと、日本への帰国の希望で話が弾んだものだ。

六月になると名も知れない野の花が一度に咲き乱れ、空は雲一つなく晴れ渡り、川の水も雪解けで量が多くなってきた。そのころになって寒さがないのげらようになると今度は南京虫が暴れ出す、南京虫(シラミの仲間)で別名トコジラミとも言う。

これは明るい所には出ないが暗くなるとごそごそはい出て我々の貴重な血を吸って行く。

南京虫は必ず二カ所に傷を付けるのですぐ分かり、又それが痒くて痒くてたまらない。この南京虫をこんな方法で退治した。まず物干し竿ぐらいの太さの枝を切ってきて、鋸の切れ目をたくさん縦横に入れて寢床の周りに置く。もちろん暗い中で準備をし、南京虫が体に近付いてきた頃合いの良しとなった所で例の明かり（松の根を燃やした照明）を灯すと、南京虫は慌てて鋸の切れ目の中へ逃げ込む。その枝を外で燃やして焼き殺すのである。この方法が一番効果があった。

毎日こんなことで夜もよく眠れなかった。夜は南京虫に悩まされ、昼は蚊に刺される。この蚊が又悪で、伝染病のマラリヤを媒介するハマダラカなのだ。刺されると高熱の発作などを起こしてとても苦しむ。これは熱帯地方に多いが、なんとこの寒いシベリアにもいて、刺され、苦しみ、もがいて死んでいった仲間も多かったです。

南京虫は、半翅目はんしもくトコジラミ科の昆虫で体長五ミリ、円盤状で扁平、翅はねは退化して小さく、全体赤褐色、頭部は小さく、口は吻状で吸血に適する。アジア南部の原産で、幼虫、成虫ともに室内に棲息し、運動は活発で、夜、人畜から吸血し激しい痒みと痛みを起こさせる。

四月十四日吹雪に死す

——日本（内地）はお花見なのに なぜここだけが——

毎日の作業（伐採）は大分慣れてきたが、何としても食べる物が少ない。更に内地とは比べものにならないくらい寒い。シベリアでもこの冬は特に寒さが厳しい。寒さを通り越しての痛さには閉口した。早く暖かくして休みたい、そんな時に作業の割当だ。

「何の仕事だ、やだなー」

「俺たちの食べ物を取りに行くんだそうさ」

「おーい、誰か行ってくれねえかなー」

誰だっけ行きたくない、しかたなくクジで決め

た。

外は四月というのに吹雪で、どこまで行くのか分かっていない、クジに当たった四人はトラックに乗って作業に行った。

「おい、気をつけて行けよ」「ご苦労さん」

皆の声に送られ、目だけ出した服装で出発した。他の者は又外套をかぶり横になって休む。

作業に行った四人の一人は伐採の時の合い方（ペア）だった。伐採には、二人一組で使う両方に柄の付いた大きな鋸で木材（丸太）を「ギーコ、ギーコ」と切っていく。二人一組でノルマ（一日の割当）が決められていた。

いつも力の有る人と組んでノルマ達成に励んでいた。その相方が秋田県出身の佐藤正和伍長で、秋田おぼこが得意で演芸会にはよく歌ってくれ、うまかった。苦勞な作業も大分助けてもらったものだ。

夕方遅くトラックが帰ってきた。食料もトラックに乗っているが一人横になって動かない。

「おい、どうしたんだ、だれだ」

「佐藤さんだ」

「何、なんだ」

あんなに元気で、しかも力持ちの佐藤さんがどうしてなのか、何があったのだろうか、すぐ医務室に運んでベッドに寝かせ、菊地軍医の診察が始められたが、時既に遅く治療のかいもなく死んでいた。

四人が作業に出たその日は出発から吹雪であった。シベリアは四月とは言ってもどこもかしこも氷の原野である。あの湿地帯（人間も沈んでしまう）もすっかり底まで凍っていて、トラック輸送には一番よい時なのである。特に何も無い川は道として最高で、戦車でも通れるので冬の道路は舗装なしで走れる。

収容所の近くに遮断機があり、伐採した薪をトラックで運ぶ時、そこで検問を受ける事になっている。

外部への出入りは、ここを通らなければならな

いのだ。早く作業を終えて帰ろうと車は猛スピードで走る。トラックに乗っている仲間たちは冷たくて前を見て乗ってられないので、後ろ向きに荷台の上に乗っていたのだった。

遮断機なんか気がつかない。運転手（ロシア人）は、ただ少しでも早く着こうとスピードを上げていたのだった。

不幸にも運転席の屋根より佐藤さんの頭が少し出ていたため、遮断機の棒に後ろ頭が強烈にぶつかり前に倒れたのだった。

マイナス三〇度の寒さの中、風を切って飛ばすトラックの荷台の上で、疲れた抑留の体には耐えきれない寒さであつたらうに。だんだん青白くなつてくる体が涙でかすんで良く見えなくなつてきた。手をしっかりと握りしめ、「ありがとう」、「よく作業を助けてくれて嬉しかったよ」今でもはつきり顔が浮かぶ、忘れられない戦友である。

佐藤さんのような怪我人が出ても薬も無く手術も出来ず、助けようにもどうにもならなかった。

病人や怪我人のほかにも帰りたい一心で頭がおかしくなつてきて逃げ出す者が出てきた。今で言うノイローゼと言うことか。しかし、収容所から一歩外へ出れば銃殺である。

そんな中でシベリア劇団を作る事にした。なんとか気持ちを落ちつかせなくては皆このようになる。帰りたい気持ちを演芸で慰めたら少し和らぐのではないか。

これも衛生兵の仕事だと自分に言い聞かせ劇団を作る事にして、皆に相談することを決意した。

まず医務室の中川衛生室の中川衛生軍曹に相談した。

「中川さん、このままでは我々まで気が変になつてくる。首を吊つて死ぬ者、あのよう逃げたつて逃げられっこないのにどうしてなのか。どうだろう、劇団員を募り芝居をやつては、少しは足しになるのではないでしょうか」

「それはいいね、それはそうと何から始めようか」

「そうだなあー、手品、流行歌、民謡、まあ出来るものからやってみようや」

そんなことで初めは田舎芝居であったが、生前の佐藤さんの「秋田おぼこ」と私の「浅間馬子唄」の共演は皆に喜ばれた。それにつけても「佐藤さんの『秋田おぼこ』なあ、ここで一番入ればなあ」とぼやいていたものだった。

夜も遅くなつたのだから時計もないので何時だか分からない。又明日考えるとして寝よう。

「お休み」

「はい、お休み」と声を掛け合つて粗末な丸太の敷いてある寢床に向かう。部屋の中は物音一つしない。死んだように皆寝ている。膝を抱えて丸くなつて横になるが、足が冷たく中々寝つかれない。隣同士の体の温もりで寝ついたようだった。

明日の朝、目が覚めるように祈りながら。

シベリア劇団誕生

— 女形を作り育つ 人気上昇大成功 —

シベリア、スイソエフカ捕虜第十三收容所に来

てからは、虎林陸軍病院の衛生兵は私一人になつてしまった。寂しく、望郷の念は募るばかり。千人からの收容所に誰一人頼る者はいない。落ち込む心を奮い起こし、皆生きて日本へ帰る日まで面倒を見てやらねばと思うが薬もなく、どうやって病人、怪我人を見ていったらよいのか途方に暮れる日が続く。自殺、精神分裂による脱走など、次々と悲惨な事故が起こる。

他の部隊に中川衛生軍曹がいた。

「軍曹殿、毎日このような事故が続いては皆の気持ちは落ち込むばかり。日本へ帰りたい、帰りたい、そんな気持ちを少しでも静めてやらねば全員おかしくなります」

「そうだなー」

中川軍曹とそんなやり取りをした後、考えていた劇団を実行に移した。名前は「シベリア劇団」。夜は名ばかりの風呂場で一時、二時になるまで劇の練習。伐採で疲れた体に一週間に一回の公演はきつく、楽ではなかった。最初はばつとしなかつ

だが、団員も徐々に増え、中には浪曲師の広沢虎造の弟子まで名乗り出て、内容は今でも恥ずかしくないほど充実したものになった。なによりも我々の演劇活動により自殺者がなくなった事、これが一番嬉しかった。

「今度は何をやるんですか」と声が掛かる。

「まあ少し待ってくれ、面白いものを考えているよ」

公演の批判や絶賛を受けると張り合いが出て益々練習に熱が入る。私の女形は日に日に板についてきて、「芝居が終わったら一緒に寝て欲しい」なんて声が掛かるほどだった。

国定忠治（時代物）から始まって、流行歌、手品、喜劇。すべて女形に徹し、毎日の作業の行き帰りまで内股歩きの練習をして、股の開かないようにしたものだった。

布、紙、草、山ブドウの絞り汁、白樺のヤニなど、大変な苦勞をして材料を集め、創意工夫をしてカツラ作りから衣装作りまでやった。

たとえば、白樺の皮を蒸し焼きにすると黒い油が出る。それをカツラに塗ると光が出て黒く固まる。これ一つにしても何人かの努力と苦勞が要る。

少しでも帰りたい気持ちまぎらわせ、笑いを呼び、人間らしさを失わせまいと劇団員は一生懸命努力した。私の本業である床屋も合間にやってやり、毎日が伐採、床屋、女形と三役であった。

収容所にあるのは両手バリカン一丁だけで、千人の頭はとも刈りきれない。そこでお互いに刈りっこするが、床屋の道具の缺、カミソリの切れ物はすべて取り上げられた。今までの事故での自殺には刃物が使われていたからだ。だが私の所には手術用の缺が一丁あったので、それを使って刈ってやった。とても見られた頭ではないが、女つけないここではどんな格好でいても恥ずかしくなかった。芝居でカツラをかぶるので、かえって具合良かった。

一週間に一度の舞台である。作業の伐採をしながら、大木の横に芝居の原稿を置いてセリフを覚

える。昼休みには床屋をやり、怪我をした者の手当てと衛生兵は忙しい。

作業が終わり、収容所に帰るときには入口でダニの検査をする。これに刺されて死んでいった者も多い。一人一人の体を点検するので時間もかかる。お互いにダニがいなか見するように指示する。

このダニは頭が黒く体は赤い。食いついたら歯が曲がっているので引つ張っては取れない。針金で作ったハリを使って掘り出すように取る。食い込んだ皮膚の回りは腫れ上がって、ダニは埋まっている。股ぐら、脇の下、耳の後ろなど柔らかい所を狙って食いつくのだ。二ミリから三ミリの大きさで、血を吸って真っ赤になっているダニのくちばし嘴はよく掘り出しておかないと毒が回って死につながるのだ。劇団員の一人、佐々木軍曹もこれで死んだ。夕食の後、体の悪い所がないか、収容所内を見回る。

「衛生兵殿、熱があるようです」の聲に跳んでいく。

「おい、ダニは見てやったか」と言いながら全体を調べる。ダニはいないようだった。

余分な毛布一枚無い捕虜の身、静かに寝ているよりどうする事もできない。

頭を冷やしてやり、横にいる仲間に頼み、次の場所へ走ると爪を潰した人がいた。伐採の時に丸太を足に落としたと言う。

「だめだ、だめだ、まずきれいに洗って」薬を付けてやりたいが薬はなく、汚れを洗い落として冷やすだけであった。

まだひどいのは鋸で指を切ってしまった者。これは皮膚がばらばらに裂けており、つきにくいので夏は化膿することが多かった。

木の枝を顔に刺してしまった者もいる。それでも眼でなくてよかった。眼にでも刺したら大変なところだ。

色々の怪我人を一通り見て回り、粗末な夕食の後、劇団員は集合する。

練習場所は風呂場、と言ってもそれほど広くは

ない。この風呂は日本のように湯につかるものではなく、釜に湯をわかして水をうめて体を拭くだけの（ロシア式）の入り方で、入ったような気にならない。

そんな所での練習もだんだん熱が入り時間も忘れて、皆が元気で祖国日本へ帰れる日を願い、シベリア劇団は続くのだった。

その後、強い助っ人が現れた。「俺は日本へ帰ったら脚本書きになるのだ」と言つて、芝居を書かせてほしいと言うのだ。大助かりである、後で分かったが、名古屋の神原さんと言う方で、愛知県岩倉市の住人であった。

劇団はそれから彼の芝居で益々よくなつてきた。中で一番人気であったシベリア金五郎（上原亀三郎）さんは東京都文京区の方であった。今はこの二人の方も帰国後亡くなられて、思い出深い劇団仲間であった。

今も「スイソエフカ会」として劇団仲間の戦友会を開いて、無事を確かめています。

人間にも羽を下さい

— 氷山にアナタ・アナタの声響き —

春。シベリアでは春と言つても六月ごろにならないと春の感じとは言えない。五月末ごろから雪解けとなり、山全体から川のようになつて解け出す。そのころになると、雪の間から黄色い福寿草が芽を出して「春がくるぞー」と呼びかけてくれるようで心がなごむ。太陽の光もやっと暖かに感じ、体ものびのびとしてくる。黒く汚れた顔を雪解け水で洗つても冷たくない。あの零下何十度の気温にしてみれば暖かい方であった。

冬は一度も顔を洗わなかつた。兵舎の灯は松脂かタイヤを細く切つたものを焚くので、煤でみんなの顔は真つ黒になつている。石鹼など無いのでなかなか落ちないが、作業で汗をかくと顔はシマ馬みたいになるが、きれいになつた。休日はまた真つ黒だ。暗い兵舎のため全員で灯をつけるからだ。

兵舎の窓は小さく、五百人からの仲間が一つ屋

根の下で生活している、壁、天井、着ている衣服まで灯による煤で真っ黒になった。

早く来い春、早く来い春、と天を仰いで祈っていた。六月になり、やっとスズメみたいな鳥が飛んできた。どこで生きていたのか、あの寒さによく耐えてきたものだ。

「おい、あの鳴き声、ウグイスじゃねえか」
確かにそれらしく聞こえる。

「まあそう言えばそれらしく聞こえるがなあ」
途中で声が引つ掛かり止まる。綺麗な声とは言えない。

「おい、まだ声が凍っているようだ」大笑いであつた。ホーホケキョ、ケキョケキョと思い出して口笛を吹いてみた。つられたのか、鳴き声が返ってきた。

「おい、やっぱりウグイスだよ」
得意になって口笛を吹き、しばしの春を満喫した。

「おい杉田、上手いもんだな。家で鳥でも飼つた事でもあつたのか」

「いやー、そんな事ないよ」

春を楽しんではいられない。「仕事だ、仕事だ」の声に作業は続く。

伐採作業であつた。毎日の割当は二人一組で大きな鋸を引き、切り倒した木を二メートルの長さで切る。それを一メートル十センチの高さで幅三メートルに積み上げる。六リユーベと言っていた。この十センチの高さに疑問を持ち、「どうしてか」と検査員に質問をしたところ、木は四角ではなく丸いから、積んだ時に隙間ができるからその穴埋めだ、と言っていた。

納得はいつたものの、少しでも楽をしたいので色々文句をつけていたものだ。

シベリアの山は日本の山に比べると険しくなく、なだらかであつた。それにそんなに大きな木はない。育たないのだろう。大きくなる木にリーパーという木があつた。日本ではしなの木と言う。柔

らから伐採では楽に切れて能率が上がるが、これは切つてはいけない事になっていた。

シベリアではこの木に咲く花で蜂蜜採取をしていたのであつた。(白く可憐な花である)

ただ、道路にするために邪魔になるものだけは切つてもいいので、それに当たつた人は楽であつた。

「おーい、おーい、倒れるどー、倒れるどー」

大きな声で叫んでいるが、どつちへ倒れるか分からない、誰しも生まれて初めての伐採。この木の下敷きになって亡くなつた者、怪我をした者が多かつたが、毎日の伐採作業で木の切り倒し方も上手くなつた。自分の思う場所へ倒せた時は嬉しかった。トラックに積みやすくなるからだ。しかし、トラックの運転手はロシア人であるので「ダワイ、ダワイ」(早く積み、早く積み)と急がせる。

二人組んでの作業であるが、ろくなものを食べていないから力が出ない。そんな事はおかまいなしに「ダワイ、ダワイ」の連発でかりたてる。汗

びつしよりになって積み上げが終わると、解け出した雪の中に大の字になって引っくり返り、晴れた空を仰ぎ休む。一日の作業はこれで終わりだが、休んだ病人の割当をこれからやるのだった。

空が晴れていると次の日は寒くなる。澄みきつた空に渡り鳥が隊列を組んで飛んで行く。

「あーあー、いいなー鳥は」

俺も鳥になつて日本へ飛んで行きたい、帰りたいたい、胸に迫つて涙が止めどなく出てきた。

「おい、どうしたんだ」

仲間が心配して来た。「見ろ、あの鳥を」と言つて指を差す。一斉に空を見上げた。

「俺も鳥になつて帰りたいよー」俺も俺もと皆泣いていた。

帰りたい、帰りたいの思いはいつも心から離れない。いつ帰してくれるのかと聞いてみたことがあつた。

「この木を全部切つたら帰す」と言つた。

冗談じゃないよ、この広いシベリアの土地、切

り尽くす事などできるはずがない。

「聞くだけ野暮だよ」と言つて笑つて済ませたが、心の中では泣いていた。(帰りた、帰りた) 病気で休んでいる者の分もやつと済ませ山から帰る。おーい、おーい集まれーと大きな声で皆を集める。毎日の仕事なのでロシア兵も日本語を覚えて、悪い言葉を発する事が多くなつた。これではいけない、いい言葉を教えようと考え、人を呼ぶ言葉は「あなた」と呼ばせるように教えた。作業が終わると山中に響く声で「アナター、アナター、ダモイ、ダモイ」と呼んでいた。(ダモイは帰るの意味)

みんなの顔は笑顔でいっぱい。よかつた、よかつた、気分いいなあ。

火の気のある兵舎、粗末な夕食に心を弾ませ、重い足取りで坂を下つていく。遠くに灯が見えてきた。空はもう日も落ち夕闇になってきた。

貴方と結婚したい

—春を食べて気が狂う お化けわらびで下

痢と戦う—

雪はすっかり解け、春である。ナホトカ港の氷も溶け日本から早く迎えに来てと思いはつのが、いつになるか……。鳥の声も多く聞こえ、野山では名も知れない花も一斉に咲いて気分をまぎらわす事ができた。

毎日の伐採作業にもやつと慣れ、日中は暖かになり、野草の芽があちらこちらに出てきた。冬の食べ物では青い物は全く食べられなかつたので、この時とばかり野草を取りまくる。何の芽か分からないが食べてみる。人体実験であつた。

日本では炭の検査員をしていたという人と他に二人が、何を食べたのか分からないが、作業から帰つてきてから具合が悪くなつた。

「おーい、衛生兵殿」と走つてきた。「どうしたのか」と聞くと、この三人がおかしくなつたと言ふ。なぜこうなつたのか、誰も分からない。

胸に耳を当ててみると、生きてはいる。頬を少し叩いてみたが目を覚まさない。「うーん、どうし

たものか」と考えたがどうにもならない。しばらく様子を見るとして、そばに一緒に寝ることにした。一日たつても目が覚めない。ただ眠っているだけで、起こしても目が起きない。二日目になり、二人にやっと意識が戻ってきた。

ぱつちり目を見開いて、異様な顔で私を見ている。

「おい、分かるか」と声をかけてみた。

「うん、分かる」と返事が返ってきた。

「どうしたのか」と詳しく聞いてみた。

伐採作業の合間に採取した草やキノコを煮て食べたらしい。

「きくらげ」に似たキノコを、「これは日本の物とまったく同じだから」と炭の検査員をしていた人が言うので信用して食べたと言う。当の検査員はまだ意識が戻らず三日目になってやっと快復したが、頭がおかしくなっていて、訳のわからない事を喋り出した。

突然「衛生兵殿、私は貴方と結婚します」と言

い出した。周りの者たちは、「おい、何言ってるんだ」

「困ったなあ、この野郎、頭が変になってしまった」

自分が何を言っているのか分からないらしい。薬もなく、どうやっていいのか思案にくれた。

一週間もたつたころ、やつとまともな事を喋れるようになってきた。

「お前、今まで何を喋っていたか覚えてるか」と聞いてみたが全く分からないと言う。

「俺と結婚すると言ってたんだ」

それを聞いて彼は頭をかいて、「すまん、すまん」と真っ赤になって謝っていた。

山は雪解けで、あちこちが川のようになっていた。食べられる野草を探して伐採作業の合間は夢中になって取った。

「おい、これ食べられるかなあ？」

「うーん、誰か食べた者いかなあ」

お互いに聞いて確かめ合っていた。

それでも毒のある物を食べ、お腹を壊す者が後

を絶たない。ソ連の警戒兵には「衛生兵はもっと注意してやれ」と叱られる。

「日本兵はコーニ、アジナコ（馬と同じで草を食べる）」といつも笑われていた。

しかし、日本にもある（のびる）（わらび）（にら）等もあり、喜んで食べた。

おかずとして食べるのであればまだよいが、ご飯の代わりに腹いっぱい食べてしまうからたまらない。下痢を起こす者がたくさん出た。

薬がないので薬を作る事にした。木炭を薬にしたのだ。色々の木で試したが、柔らかな「しなの木」が一番よかった、こんがり焼き、石で擦り潰した物を何日か続けて飲まずと治った。

このしなの木は長野駅前整備の時に植えられ、ああ、これだ、この木だと懐かしく見た。

シベリアではこのしなの木、白い花が咲くので蜂蜜をとるため切つてはいけないう事になっていった。

軟らかなことから、蜂蜜を入れる樽を作る貴重

な木であった。お腹を壊す者が多くなるので「一度に沢山食べるなよ」と皆に注意するが、若い者にはあまりも少ない毎日の食糧であったので、しかたがないと思つた。

今でいうビタミンが春になってやっと取れるので、相変わらず野草の採取には熱が入る。

今日も作業の割当が済んで、わらび取りに行く。日本では芝わらびと言う痩せたわらびしかなくつたが、それでも一生懸命に探し回つて取つていた。背より高い藪の中、かき分けかき分け探すのは容易ではなかつた。

ある時、突然藪が切れて、目の前に広い草原が広がり、目を疑つた。わらびのお化けがあるではないか。

直径二センチ、高さ一メートルもある巨大なわらび。茎の色は紫に近く、頭の部分も開かず、垂れている。皆で顔を見合わせ、声も出ないほど驚いた。

ソ連の原野はよく火事になる。時には一年中燃

えている事もあって、冬にたくさん雪が降った時
か雨がたくさん降った時にやつと消え、また春に
なつて燃えるという事を繰り返している。その火
事の灰が積み重なつた場所であつた。靴が埋まる
ぐらいの灰の中、それまで取つていた芝わらびは
投げ捨てて、その大きなお化けわらびを夢中で取
つた。

帰つてから飯盒に灰を入れてアクを取つてゆで
る。一人で十本も食べれば腹は超満腹になるが、
又下痢になる。

「二本か三本ぐらいにしておこう」と皆に触れ
回つた。

足が立たない生活に泣く日々

― 蚊とハエの攻撃に傷腐る―

今日は休日、いい天気で日本晴れた。いや違う、
ソ連晴れかと一人言を言いながら空を仰いだ。

七月初旬ソ連も夏であるが、直接裸での日差し
は暑い。しかし、日陰に入ると日本とは違い冷え
る。腰から下へ日が当たるようにして昼寝。又日

本にいる親弟妹に会つてゐる夢を見ながらうとう
と・・・。

「衛生兵はいるか」突然ドクトルの声。(ソ連の
軍医)

「ここにいます」昼寝の夢が破られた。眠気眼
で話を聞くと、虱退治の消毒小屋を建てるように
の命令であつた。

幾ら取つても取りきれない虱が毎日の悩みであ
つた。早速作業員を集めて直系二十センチぐらい
の手ごろな木を採りに行く。とにかく四方を天井
までぎっしり積んで土を壁に塗り付けるのだから
大変な労力であつた。

広さは八畳間ぐらい、天井の高さおよそ二メー
トル。反対側に出入口の小さな扉を作る。正面の
下にドラム缶を差し込む穴をあけ中に入れ、ドラ
ム缶に開閉できる蓋を付け、そこから薪を入れる。
ドラム缶の上には無数の穴をあけ、その上に石を
乗せ石を焼くのだ。小屋の中は暑く入れないほど
で、頭から濡れた毛布の切れ端をかぶり、バケツ

にいつぱい入った水を焼けた石にかけると、蒸気となる。天井より我々の被服を吊るしておく和被服の中にいる虱が死ぬ。

これを何回も繰り返して全員の被服消毒が終わるのであった。ある日、昼飯をすませて午後消毒にかかり、炊き口で薪を入れどんと燃していた。まだ蓋を閉めない内に誰かが水を懸けてしまい、ズボンをまくってしゃがんでいた私の足、膝から下へ蒸気が逆に吹きつけてしまった。「あつーい」と言って飛びのいたが間に合わなかった。おまけに尻餅をついてしまったので容赦なく蒸気を受けてしまった。痛いのと熱いのがいっぺんにきた。

慌てて近くの川に飛び込んで膝まで沈む深さにしてしゃがみ込み、涙も出ない苦しさになつていた。午後の日も沈み暗くなつてきた。岸边にいる同僚が「上がってこいよ」と呼びかけてくれるが、足を水から上げると痛みが全身に走る。又水に沈める。しかし、いつまでもいられない。痛さを抑

えて岸に上がる。付ける薬は何一つない。見る間に膝から下がふつくらと水膨れになつてきた。

やつと涙が出るようになった。言葉では言いようもない痛さの連続で毎日泣いていた。

七月ともなればシベリアも夏、ハエも蚊も出る。

特に蚊は特大で、日本の蚊より二倍はゆうにあって、血を吸う量もそれだけ多い。風呂にも入らず、まして傷の所は臭うのでハエも蚊も寄つてくる。それに吸われると傷は化膿して傷口から腐つてくる。消毒薬がないのが悲しかった。水で洗うがその水も綺麗ではなく、水は沸かして冷やして飲む方法である、傷の消毒もその水を使うくらいで傷口は綺麗にならない。水膨れの足、しかも両足であるから動くことが出来なかった。松葉杖なんかない。作つてほしかったが誰もそんな余裕はなく、厳しい強制労働で自分の事だけでも精いっぱいだったのだ。

足が立たず歩けない生活が続いた。

^{かか}踵の後ろが、かろうじてつけるが、立つ事が

できない。一番困った事はトイレで、場所が少し離れた所であり、そこまで行くのに雨の日は晴れるまで我慢であった。手を足代わりにお尻をついて踵を交互につき、芋虫のような進み方であった。

柱におさまって立ってみるが、痛くてまだ足をつく事ができない。昼も夜も蚊に悩まされて眠れない。痛さも一カ月ぐらいたつてからやっと楽になつてきたが、水膨れが破け汁が出るので、その臭いで蚊が攻めてくる。仕方なくガーゼのような布をもらい蚊帳を作り、その中へ足を入れて寝るようにしてやっと眠れるようになった。

吹きつけた蒸気が強く当たつた所は中々傷が良くならない。まだ汁の出る所あり、又痒みが出て、無意識に搔いてしまい、朝起きてみると血が出ている。皮膚が薄くなっているからで、なかなか良くならない。しかし薬も付けず何の治療もしないで治る人間の強さに勇気がわいた。

二カ月以上もかかり九月に入りやっと良くなつたが、足の怪我はこれだけではなかつた。

昭和十六年頃、まだ十代であつた。戦争も激しくなつて人手が足りないということで男も女も徴用といつて軍需工場へ駆り出された。今の埼玉県熊谷に飛行機の部品でピストンリングを作つていたころ、旋盤という機械（かなり大きく重い物）を頑丈なリヤカーに乗せ運んでいた時、リヤカーの足が石に当たり前に転び私の上にリヤカーが乗り、坂道を腹ばいになつたまま滑つた。足の肉が削れて骨が出るほどになつたこと。又国境から逃げて来た時にソ連の飛行機に撃たれ股に当たつた傷もある。痛い思ひはそれぞれにあるが、薬の無い時の怪我ほど切ない思ひをしたのはこの時が一番であつた。

虎林陸軍病院の衛生教育が身につき、いい治療ができた。

（衛生兵全書の教程に火傷について載つてゐる。）

「第百十三 処置ハ衛生法及び救急法ニ依ルノ外左ノ如シ 皮膚赤クナリタルモノハ清潔ナル油

ヲ塗り要スレハ冷水「ブロー」液又ハ硼酸水ノ
罨法あんぼうヲ行フ、水泡ハ滅菌シタル鉢又ハ燒キタル針
ニテ其縁ヲ刺シ液ヲ漏シ水泡ノ破レタルモノモ苞
皮ヲ除クコトナク軟膏ヲ貼り又ハ油劑ヲ浸セル滅
菌「ガーゼ」ニテ被ヒ輕ク包帯スベシ 火傷廣ク
シテ口渴アル者ニハ温キ茶、湯等ヲ飲マシメ「メ
ンタ」酒等ノ酒類ヲ與フヘシ」

以上のようになっているが、捕虜として扱われ
る身、ましてこちらに都合が良い事は言えない。
それに医学の差が日本とは十年遅れていると言わ
れていた昭和二十年ごろの事である。今はどうだ
ろうか……

薬や包帯、消毒薬もなく腐っていく場所にハエ
や蚊が群がり地獄であった。

ボロ布を足に掛け虫を追う。膿を拭きたいが綺
麗な紙や布がないので、水で洗いに当てる乾か
す。その繰り返しでやっと歩けるようになった。

足が立たない生活が続いたので手の皮が厚くな
った。

冬の寒い時でなく夏でよかった。冬のトイレは
絶対に行けない。滑るのと、トイレに着くまでに
凍ってしまう。吹雪にでもなれば帰って来れない
し、まごまごしていて便壺へ滑り込んでしまっ
たらだ。

忘れられない苦しい思い出である。

あれから六十年、未だに冬になってズボン下を
履くようになると圧迫されるせいか、無性に痒み
が出て無意識の間に搔いてしまい、朝起きてみる
と血だらけになっている時があつて驚く。

火傷の傷は足の禿はげだからズボンをはいていれ
ば外からは分からないが、シベリア劇団での女形
ではスカートの下から見える足がシミだらけで醜
い。所々に又生えている毛もかえつて邪魔になる。
切れない刃物で傷をよけて剃る。顔でなくてよか
った。女は顔が命と白く塗らたててごまかし舞台
に立つ。一人三役の衛生兵は忙しく喜ばれた。

ロシア語は難しい。あとは手つき手真似で何と
か話が出来たが、気に食わない時はロシア語が通

じないふりをしていたもんだ。

そんな時は怒って通訳を連れてきて「ポニマイ、ポニマイ」分かったか、分かったかと念を押していった。

しかたなく「ウン、ウン」と言って重い足を引かず作業に出かけた。

仕事にノルマ（割当）があつて、毎日二人で十二立方メートルの薪を切り、自動車に積みやすく斜めに積み上げる。

これが寒い時は大変な労働であつた。慣れない仕事で立木など切つた事がない。どの方向へ倒れるか、切っている人達にもわからない。その下敷きになって怪我をし、又死んだ者もいた。膝まで積もつた雪をかき分け吹雪の中の伐採は、零下四〇度となるシベリアの空、寒さも半端ではない。泣きながら作業を続ける事もあつた。

割当ができない時があつた。あの寒い山の中に立たされ帰る事を許してくれず、何時間もその道に暗くなつても帰してくれない。寒さも限界、足

踏みをして寒さを堪える。

明日その分やるからと手つき手真似で頼むが聞き入れてくれない。ロシア語の通じない事の切なさも、いい時と悪い時があつて苦労したものだ。

最初のころはそんな事で話が通じない事が多かつたが、だんだん言葉が分かるようになってきた。お互いの気持ちも分かるようになり、仕事もやりやすくなった。

伐採作業の割当も済み、焚き火を囲んで休んでいた。警戒兵が近寄つてきて、「ラポータ、カンチャイ？」仕事は終わったのか、と尋ねてきた。「カンチャイ、カンチャイ」と答えると私の所へ一緒に座つた。階級の低い識別を付けているが、どうもおかしいので、色々手つき手真似を交えて聞いてみると、上官を殴つたので下げられたと言つていた。

日本ではそんな事できないし、階級が下げられるなんて無いと言つたら笑つていた。やはり上官であつて、一般の兵隊とは違いがある。おおらか

なところがあつて話しやすかつた。じきに元に戻つたようでした。

一般の兵隊は日本の一年生より頭が悪い。数がよく数えられない。それで助かつた事がしばしばあつた。病人が出ても熱がなければ休ませない。腹痛、腰痛、外から見た目に分からない事についてはダメ。そんな時は作業に行く人数をごまかすのに、正門に整列、出発の時の並び方でごまかすので助かつた。ただ休ませた者の割当は皆で済ませ、検査に合格した。

日本の義務教育の良さはその時に感じた。数を数えられない者は子供から大人まで日本人にはいない。

泥棒の班長を引受け

―パンに煙草がなくなる―

千人一団体の兵隊をロシア全土に捕虜として連れて来て、作業は炭鋏、伐採、色々させられた中に衛生兵は配分され、虎林病院衛生兵は二、三人で、伐採地の収容所では私一人になっていた。怪

我人、病人の看護、毎日が戦争と同じ。葉がない、包帯がない、これじゃあ治せない、お手上げだ。

作業に行つた時落下傘を見つける。少し破つて持ち帰り包帯や蚊帳になつた。足の怪我などに付くハエや蚊をよける。怪我は葉がないのですぐ化膿する。ハエ、蚊は臭いに敏感で直ぐ飛んで来て卵を生む。ウジが湧き肉まで食い荒らす。水でよく洗い流すしかない。じくじくしていると又ハエと蚊に狙われるので乾かす。

作業を済ませ帰りは皆の身体検査。ダニにやられる者がほとんどで、このダニは助平で脇の下、股ぐらと柔らかい所を狙つて食いついてくる。そのくちばしは中に曲がついて、食いついたら引つ張つても取れず、強く引くと首がとれくちばしだけが残る。こうなると高熱が出て死に至る事になる。何人か、これで苦しんで死んでいった。

わずかばかりの「たばこ」の配給があつた。巻き煙草ではない。細かに刻んであるので粉の所もある「マホルカ」と言つていた、新聞紙を巻紙に

して唾で糊付けして吸った。なかなか上手く巻けない、苦勞した。ロシア人は上手いもので感心した。

枕元に置いた煙草がない、盗られた。あつちでもこつちでも声が上がった、誰だ誰だの声、犯人はじきに上がった。

皆の前に引き出され平謝り。煙草泥棒を誰か監視することになり、衛生兵殿が適任となり、引き受ける事となった。何人かの泥棒を呼び寄せ、自分に配給された煙草を枕元に置き、「俺のは勝手に吸っても良いが、他の者の物へは手を出すな」と叱り、寝起きを共にした。

その中で一番の悪い泥棒で忘れられない一人がいた。珍しい名前で見えてる。鬼木といった。今どうしているか会ってみよう。その後泥棒はいなくなった。日本に帰るまでは皆助け合って生きていこう。

この時指導に当たってくれた寺の坊さんには、協力、感謝であった。

思い出の地 舞鶴を訪ねて

・ ・ ・ 涙、涙で舞鶴記念館に立つ ・ ・ ・

シベリア抑留三年を経て祖国日本へ帰ったのは、昭和二十三年九月二十四日であった。もう五十余年がたつ。

毎日のように夢に出てくる親兄弟姉妹、引揚船に乗った時の嬉しさ、今思い出してもハッキリと脳裏に浮かんでくる。あの感激はもう言葉では表せません。

遠く日本（故郷）を夢に見ていた山々、そして緑、濃い松の木々、波、穏やかな舞鶴港に滑るように入っていく。

全員甲板に出て声もなく、じつと目をすえて見入っている。

「これが日本だ、故郷だ」と、ギュッと握った拳で頭を叩いてみる。夢ではない。やつと生きて帰れた。

「やっぱり日本は綺麗だ」皆声を揃えて「綺麗だ、綺麗だ」と、目には涙さえ浮かべている。

ああー、三年間の抑留が走馬灯のように頭の中がくるくると回り、涙が止めどなくあふれてきた。

その感激の地舞鶴を訪ねた。あの岸壁はどうなっているのか、まだ残っているのか、バスは記念館に着く。

もう先発の福井の先輩山本さん、武長さん、井の口さんの三人がお出迎え。

「どうもすみません、ありがとうございます」
挨拶もそこそこで記念館に入る。一步入ってまた涙。

「来て来て、私たちの写真が載っているよ」
その声に跳んで行つて見ると、そこには虎林陸軍病院の水野部隊長、牛山大尉、その後ろに看護婦さん達、たくさん勢ぞろいしている。

「あーあー、あの後ろから二列目の右から四人目、あれ私よ。あーあー十九だったか、二十歳だったか、若かったよね」

どれどれと皆、寄ってきた。あれから五十有余年。

「部隊長だ」「あ、牛山さんだ」と皆、涙をこらえ切れず、頬に伝わってくる涙を拭きもせず、あれは誰、どれ、どれと、ひとしきりここに釘付けとなった。

抑留生活の兵舎の様子が蠟人形の様にして作っており、首が動いていた。丸太を敷きつめた二段ベッドであった。

「こんなに痩せて、見て、あの手、骨に皮ががぶさつてるだけよ」

「あ、パンも置いてある」

「いやー、俺たちのいた所はあんなに大きなパインではなかった、あの半分くらいだったよ。それにオートミールという糊のような物だった。それが軍隊の牛缶（三号缶）一杯、一息に飲んでしまふ量であった。寝床は丸太の上に枯れ草を敷き、お互いの体の温もりで寝ていたのだ」。私の説明で皆「うん、うん」とうなづく。「可哀想だったねー」

記念公園へ行きましようの声で、まだまだ見きれない思いであったが公園に行く。小高い丘を登

る両側にそれぞれの部隊、また仲間の人達による植樹がしてあった。

我が看護婦さん達による桜の木も少し大きくなっていたよう、そこで記念写真を撮る。

静かに聞こえてくる「異国の丘」「岸壁の母」の歌声を聞きながら思い出の岸壁を見下ろす高台に出た。

眼下に見える栈橋、遠くに見える入り組んだ湾。

「そうだ、あの、あそこから船が入って来たんだ」

そしてわずかに復元された栈橋が眼下に見える。

「あんなに短いのー」

「いやー、もつと長かったよ。木が腐ってしまったので鉄骨で復元されたようだね」

朝日新聞社発行のアルバム「シベリアの日本人捕虜收容所」を拝見し、また引き揚げ港、舞鶴の記録を見たが、俺たちのいた所はまだこれ以上ひどかった。写真などない。食糧など一日三五〇グラムと書いてあったが、とんでもない、あの三キ

ロの黒パンを二十四人で分けたのだ。

将校、下士官、兵は米三〇〇グラムとある。米なんか見たことない。肉五〇グラム、魚一〇〇グラム、それに味噌、油、野菜支給と文章には載っているが、とんでもない。

人間、生きていくには砂糖より塩と水が大事とつくづく感じた。塩は鮭の腹に入っている岩塩と言つて石ころのような塊であつて、それを石で叩いて潰し、野草など茹でて食べる時につける。これが一番の御馳走であつた。これも夏だけの事、冬は野菜の代わりになるものは何一つない。

次から次へと思ひ出が浮かんてくる。復員船の名前の中、山澄丸を見つけた。そうだ、あの船に乗つて俺は九月二十四日に二千人、ナホトカからの復員であつた。

昭和二十年十月七日、釜山から復員が始まつた。二十一年十二月八日からシベリア、ナホトカからの復員が始まつた。復員完了は昭和三十三年九月七日まで、実に十三年の長きにわたつた。

遺骨返還を願い叫び、世界平和を呼びかけ、全
国戦友会が無事盛会に終わった。

◎ 詫びて今 岸壁に立つ 生き残り
ナオトカへ 迎えに行かずば 帰れぬ戦友が

満州哈達河開拓団の悲劇

「麻山」集団自決事件に思う

神奈川県 丸山 國武

昭和二十(一九四五)年八月十二日、旧満州の
東部国境に近い麻山において避難途上にあつた哈
達河^{タハ}開拓団の一団がソ連軍の包圍攻撃を受け、婦
女子四百数十人が自決するとゆう事件が起つた。
介錯は四十数人の男子団員により、小銃を用いて
行われた。男子団員はこの後ソ連軍陣地に斬り込
むことになつていたが果せず、間もなく終戦を迎
えこれら壮年男子の過半数は新京(長春)、ハルピ
ンへ逃れ、あるいはシベリアで收容されて、生き
て祖国の土を踏むことになつたのである。なぜ自
決したのか、新聞報道によれば刺殺とあり、また
は虐殺となつている。本当に自殺自決であつたの
か、なんで生きて、生きていなかつたのか、なん
でもっと生きようとしなかつたのか、人間の生と